アネラ

終野真冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アネラ

【Ｎコード】
Ｎ６９１２Ｚ

【作者名】
終野真冬

【あらすじ】
『はーい、先生』

お子様中学生と気苦労のたえない塾講師。
幼馴染の二人は、今年私立受験を控えていて――。

青年×少女　現代・短編

絶対安全領域

「きょーちゃん！」

冷たいリノリウムの床をキュッキュッと鳴らし、足音が近づく。
その声の持ち主は、どう考えても一人しかおらず、俺はため息をつきながら振り返った。

「はな……ここでは先生って呼べって言ったろ？」
「あ……えへへ、忘れてた」

何度注意しても直らないその癖に、もう諦めかけているが、言わずにはいられない。
大体このシチュエーションがおかしかった。
どうしてわざわざ、俺の勤めている塾に、幼馴染が通っているのか。
まったく意味が分からない。

バツが悪そうに、はなはえへへと舌を出して笑う。
その仕草は、中三の女の子がするには幼いのに、はなには妙に似合った。

「今日も家行っていい？」
「……あぁ、来いよ」
「やったぁー。きょーちゃんのパスタ食べれる！」

バンザイを連発し、身体中で喜びを表現する幼馴染に、クスクスと笑いを零す。
今日の我が家のメニューは、強制的にパスタになりそうだ。
まぁ、俺も嫌いじゃないし、美味しそうに食べてくれるのだから悪

い気はしない。

「今日って、例のディナーショーか？」

「うん、多分ね。お母さん、朝からはり切ってたし」

友人同士の俺たちの両親は、俺にはなの面倒をおしつけ、自分勝手に用事を入れる。

最近は、それにも慣れてきて、まったく逆らう気にならない。

というよりも、はなを一人の家に置いていく位だったら、俺が面倒を見ていた方がマシだと気づいたからだ。

一回、はなに留守番を頼んだことがあったが、あれはひどかった。

スパゲティを作ればラーメンが出来、洗い物をすれば食洗器が壊れた。

あれから俺も学習して、はなには包丁の一本も持たさないことにしている。

下手したら、コケた拍子に包丁が飛来して、誰かのわき腹にぐっさりというのもありえるからだ。

少なくとも俺はそんな被害に遭いたくない。

だから、どんなに面倒でも、他の連中にバレたら厄介でも、はなの面倒を見ている。

「はな、他の生徒に俺のこと言うなよ？」

「え……どうして？」

「どうしてって……」

言わないでも分かれ、この馬鹿娘。

仮にも塾の講師が生徒の一人を家に連れ込んでると知れたら、俺は解雇だ。

職を失ったらどうしてくれるなんて、はなに言っても無駄だろう。
別に幼馴染なんだからいいじゃんと軽々しく言い返されるに違いない。
大人の世界に、幼馴染なんて言い訳が通じるわけない。
何かを伝えることを諦めて、ため息をつく。
誰かに見られないように、身体の陰に隠して鍵を渡した。

「……もういい。先帰ってろ」
「はーい、先生」

行儀よくお辞儀をして、はなは去る。
呼ばれた『先生』という呼称に違和感を感じて、俺は首を傾げた。

＊　＊　＊

「あのね、この前おばさんと話したんだけど」
「……おふくろが何だって？」

俺が調理している間、はながやった問題に丸をつけていく。
途中三ヶ所ほどスペリングミスを見つけ、内心落胆する。
はなに何度言っても、ケアレスミスが減らない。
いつも、ちゃんと見直してから提出と言っているのに、中々直らない。

「おばさんの料理が美味しいから、娘になりたかったって言ったの」
「あー。まなさん、不器用だもんな……」

はなの母親のまなさんは、はなによく似て不器用だ。
それに比べ、うちの母親は平均的な主婦より少し出来るくらいか。
まぁ、飯が不味かったことはないから、俺はそれで満足している。
最後に点数を書き込み、はなに手渡す。

「ほら、答案。問４の？間違ってるぞ」
「あ……ホントだ。うえー、苦手なところじゃん」
「お前、いっつも同じとこばっかり間違えるよな」

一息ついて、傍らのマグカップからホットウーロンを飲んだ。
俺の返した答案をじぃーと睨むはなは真剣で、問題文と答えから目を離さない。
他のこともそれくらい真面目に取り組めば出来ないことはなさそうなのに。
でも、料理だけはしないでくれると、俺の胃が助かるのだが。

「本番は、そこ落とすなよ」
「……わかってるよー」

私立の受験はたった１問が命取りになったりする。
ケアレスミスなんかで、不合格になったとおふくろに知れたら、俺が怒られる。
あんたの指導力不足よなんて幻聴が、今にも聞こえてきそうだ。

「それでね、おばさんなんて言ったと思う？」
「うーん、おふくろがね……」

過ぎたことはしょうがないと諦めたのだろう。
いそいそと答案を鞄に仕舞うはなを横目にマグカップに口をつけた。

「京大と結婚してくれたら、いくらでも作ってあげるわよだって」
「ぶっ……！？」
吸い込んだものを思いっきり吹いた。
言葉の意味が理解できず、目を白黒させる俺をよそに、はなは勢いよく立ち上がる。
「だから、はな。頑張るね！」
ご飯ありがとう。またねと言い残し、制服のスカートを翻して、はなは玄関の外に消えた。
それに時計を見ると、午後１０時。
もうまなさんも帰ってきている時間だった。
「何をだよ……」
呆然と呟いた言葉に返るものはなく、むなしさを煽るだけだった。

乙女の憂鬱

「……これから塾か。嫌だなー」

私の吐いた大きなため息が、放課後の教室に無造作に落ちた。
それは、ただでさえ憂鬱な気分を、さらに降下させる。
カタっという音と共に背後に現れた気配に振り向くと、頼れる良き親友がかばん片手に立っていた。

「塾がイヤだなんて珍しい。何かあったの？」
「……きょーちゃんに相手にされない」
「……いつものことじゃない」

美穂ちゃんの苦笑しながらの一言に拗ねる。
確かにいつものことなのかもしれないけど、そこまではっきりと言われると私だって落ち込む。
相手にされないどころか、分類的に女の子だってことにもきょーちゃんは気づいていなさそうだ。
私を『女』扱いしてほしいのに、いつまでも子ども扱いばかりされている。
それが不満でたまらない。

「うーん、そうなんだけどねー。ここまで脈がないとやる気も失せてくるって言うか」
「誰か紹介しようか？」
「……まだいい。きょーちゃんを好きでいたい」

気がついたら、私の世界はきょーちゃん一色だった。
いつから好きだったか分からないくらい、ずっときょーちゃんだけ

を見てきた。
これからだってそれは変わらない。
今さら諦めて、他の誰かと付き合うなんて、これっぽっちも考えられなかった。

「はなも、恋する女の子なんだね」
「……うん」

せめて、私がきょーちゃんのことを好きだって気づいてもらいたくて。
きょーちゃんに女として扱って欲しくて、必死に背伸びをしているのだ。
私が大人だって気づいたら、きょーちゃんも好きになってくれるかもしれない。
そんな淡い希望にすら賭けてみたくなる。

「なんか……計算高くなった」
「……どこが？」

にやりとしたり顔で笑う美穂ちゃんは、ひどく面白そうだ。
でも、『計算高い』といわれるようなことをした覚えがなくて、私は首を傾げた。

「今まで、家庭科で5以外取った事ないでしょ？」
「う……きょーちゃんには内緒にしてね？」

実は、スパゲッティも洗い物も、果てはかつら剥きまで出来たりする。
最近はまり始めたのは飾り切りで、いっそ将来は板前でも目指したらどうだと家庭科の先生にも言われた。

きっと先生は、私が家で料理の出来ない振りをしているなんて思わないに違いない。

「……肉まん一つで許そう」
「ありがとう」

上目遣いで頼んだ私のお願いに、美穂ちゃんは大きくため息を吐いて許してくれた。
この小さいようで大きな嘘を隠してくれるなら、肉まん一つぐらい安いものだ。

「でも、家族にまで料理できるの隠してて大変じゃない？」
「だって、お母さんとおばさんって仲良いんだもん。すぐバレちゃうよ」

社宅で家が隣同士の石田家と葉山家の奥様同士は、子供の私たちがびっくりするほど仲が良い。
ぽやぽやとしていてドジばかりの私のお母さんと、あっけらかんとしたきょーちゃんのお母さん。
一見気が合わなさそうな二人だけど、放っておくと勝手に二人で旅行に行ってしまうくらいに気が合うらしい。
お互いにどんな話も包み隠さず話しているそうだから、一時も油断は出来ない。
どこからきょーちゃんの耳に入るか分からないからだ。

そうなったら、今まで積み上げてきた『放っておけない、ドジで可愛い幼馴染』の像が壊れてしまう。
それだけは避けたかったから、未だに私は包丁ひとつろくに使えない女の子を演じている。

いつどこで誰が聞いてるとも限らない話を切り上げたくて、私は美穂ちゃんに話を振った。

「美穂ちゃんは……今はこの前会ったあの人と？」
「えーっと、３０歳の商社マン？　ずっと前に別れたよ」
「それって……最後まで２０歳だって勘違いしたままだったんだ？」
「そうそう。ホントにアホなオッサンだったー。別れて正解だよー」

あの日の美穂ちゃんは、お化粧を濃い目にしたとはいえ、全然若く見えた。
最後まで２０歳だと騙されたままだったなんて相手の商社マンも不憫だ。
結婚すら出来ない小娘に本気になった上で捨てられるなんて可哀想だと思う。
でも、騙された方が悪いなんて考えてしまうのだから、私も大概性格が悪い。

背後から聞こえたゴツンという音に、体ごと振り向く。
そこには不機嫌そうな待ち人がいて、私はその理由を考えて首を傾げる。
さっきの物を置くときにするような重たい音は、どうやら鞄のようだった。

「また……たんまり貢がせた上で捨てたのか？」
「えー、そんなことないよ。ほんの少しだってぇー」

心底嫌そうに質問した祥希くんに、媚びるように可愛い子ぶってみせる美穂ちゃん。
その目は『そんなの当たり前じゃない』と言外に告げていて、私もため息を吐かざるを得ない。

祥希くんもそんな気分になったのか、道端の害虫を見るような目で美穂ちゃんを睨む。

「……一回死んでこいよ、この売女」

「……ふふふ。そう言えば祥希って、この前女の子と腕組ん――」

「あーーーあーーー。きこえないっ！」

くすりと楽しそうに美穂ちゃんが微笑んで言った内容に、祥希くんが大声を上げる。

その大音量に鼓膜が麻痺して、私は目を白黒させた。

「祥希くん、何かあったの？」

「うん、それがね……」

「すみません、俺が悪かったです。金輪際余計なことは言いませんので、今回だけは許してください」

「……ふぅー。まぁ、許してあげよう。肉まん４つで」

「多っ！？」

私を蚊帳の外にして二人は落ち着く。

それを傍から聞きながら、時計を確認する。

５時３０分。今から出れば、６時の講義に充分間に合う時間だ。

思い切り音を立てて椅子を引く。

それに気づいた二人が、急いで身支度をするのを横目で見ながら、教室のドアに向かった。

あとから二人が追いかけてくる足音がする。

それはやがて隣に並んで、私の服のすそを引いた。

「ねぇ、はな。葉山先生と二人でご飯って危ないんじゃない？」

「え……どうして？」

「いや、だってあっちはオ・ト・コよ。オトコ！」
今までそんなことを一言も言わなかったのに、今さら何を言っているのか。
数えるのが面倒くさくなるほど、きょーちゃんと二人でご飯を食べている。
男を強調して言われても、何が危ないのかイマイチよく分からない。
「それがどうかしたの？」
「あーーもうっ、なんて世間知らずなのかしらっ！」
訳が分からなくて首を傾げた私に、美穂ちゃんはじれったいのか地団太を踏んだ。
そんなことを言われても、何が世間知らずなのかが、やはり分からない。
「二人っきりになったら襲われちゃうかもしれないでしょ！　危ないったらありゃしない」
「……ありえないよ」
拳を掲げて力強く言われた言葉に、私は苦笑する。
二人っきりになったら襲われるなんて、私たちに限ってはありえない。
「だって、きょーちゃん。はなのこと、子供としか見てないもん」
「はな……」
「どれだけセクシーな格好できょーちゃんの部屋に行っても、相手になんかされてないし……」
「……」

胸元の開いた服でも、短いスカートでも、ショートパンツでもいつも反応は同じなのだ。
『あんまり冷やすと風邪引くぞ』の一言だけで、欲しい言葉はひとつもくれない。
どれだけ朴念仁なのだと憤っても、きっときょーちゃんには通じない。
そもそも私を女の子だと認識すらしていないのだ。
考えれば考えるほど、この恋は不毛だとしか思えない。

自分で言ったことが深く刺さって、じわじわと悲しくなる。
子ども扱いされていることに傷ついているなんて、本人は想像もしないに違いない。

突然、真横からガシッと肩を掴まれる。
その力の強さに驚くと、やけに真剣な顔をした祥希くんと目が合った。

「はな、それはやめておけ」
「……どうして？」
「お前には似合わない」

祥希くんがそう言ったと同時に、その後頭部に鋭い一発が決まる。
それに目を見開く。
背後で叩いた手首をクルクルと回す美穂ちゃんは至って涼しい顔だ。

「なにしやがんだっ！　このアマっ！！」
「黙れ、クソガキ。はなに似合わないものなんてないに決まってるでしょ！　あんたにはなの可愛さの何が分かるのよっ！」
「はぁっ！？　お前みたいな尻軽女より、俺の方がよっぽどはなの可愛さを知ってる！」

「何ですってっ……！？」

そのまま私の頭上で言い争いが始まる。
学校の帰り道、制服を着た私たち三人に、通りすがりの人の視線が集まる。
それを恥ずかしいと思いつつも、私に二人を止める体力は残っていない。

「あー……うるさいなぁ」

棒読みで発した言葉に余計生気を奪われる。
私じゃない誰かが、この喧嘩を止めてくれればいいのに。
でも、止める人は現れないし、二人の争いは終わらない。
それに疲れて、歩くスピードを上げる。

私の可愛さをどちらがより知っているかなんて言い争いするだけ無駄だ。
二人に分かってもらっても、何にも嬉しくなかった。
私の可愛さを分かってくれればいいのは、この世界でただ一人。
でも、その当人は一向に分かってくれなくて。

これから講義で会うことを憂鬱に感じて、私はまたため息を吐いた。

幼馴染略奪宣言

「先生、さよならー」
「おう、気をつけて帰れよー」

バタバタと廊下を駆けていく塾生たちに軽く手を振る。
やっと終わったと肩を叩いて振り返ると、そこには数人の女子生徒がいた。

「先生ってこの後ヒマ？」
「ヒマだったらお茶しようよ！」

腕を両側からガシっと掴まれ、身動きを取れなくされる。
彼女たちをそのままにして足早に講義室へ向かう。
そんな俺に諦めずついてくる生徒たちに苦笑した。

「いや、暇じゃないんだなーこれが」
「もしかして、彼女って奴？」
「えー先生。わたしたちのことは遊びだったんですか！」
「おい、待て」

冗談じゃ聞き流せないその言葉に俺は固まる。
仮にもここは職場の廊下で、彼女らはお客さま。
手なんて出すはずがないのに、遊びとは何だ。
彼女たちを傷つけないようにさりげなく拘束をはずし否定する。

「遊びも何も俺は塾生に手は出さないよ」
「先生って嘘つきだー」
「嘘吐くとろくな大人になれませんよー」

生徒たちの嘘つき呼ばわりに一人の知り合いを連想して、俺はいっそう苦笑いする。
そいつは自他とも認めるろくでもない大人で、正直自分でもなぜ友人などをやっているのかわからない。
自堕落で嘘つきで欲望に忠実。
彼女たちにそんな奴と一緒にされていると思うと鳥肌が立ちそうだ。
嫌悪感を顔に出さないように、きわめてにこやかに俺は聞いた。

「俺がいつ嘘吐いたって？」
「えー。だって、先生って石田さんにはすっごく優しいじゃないですかぁー」
「そうそう。石田さんが分からないところがあるといっつも授業止まるし」

一瞬、心臓が止まりそうになった。

はなをひいきしていないと言えば嘘になるが、それを誰かに察せられないように気をつけていたはずだ。
気づかれないよう細心の注意を払ってきた結果、他の講師にはまったく気づかれていない。
それを十年と少ししか生きていない中学生に察せられてしまうなんて不覚だった。

内心の動揺を押さえ込むため、ゆっくりと息をする。
視線を逸らさず、顔に笑みを貼り付けて、俺は口を開いた。

「まぁ、それはだな……進度の遅い生徒に合わせるのが俺のスタンスだからだよ」

「えー、じゃあそれって、全然授業進まないじゃないですか」
「石田さんばっかりずるいっ！」
俺の言い訳に納得できないのか、あからさまに不機嫌になる生徒たちに心底困った。
なんと言えば分かってくれるだろう。
何を話せば仕方ないねといってくれるだろう。
この年代の子たちは上辺だけの取り繕った言葉にすぐ気づく。
大人の都合で誤魔化した言葉に、どんどんと心を閉ざしていく。
自分にも覚えがあるだけに、適当なことを言うつもりにはなれなかった。
返答に悩む俺を観察するような視線。俺は慎重に言葉を選ぶ。
「お前らは得意かもしれないけど、石田はな、英語が苦手なんだ」
「わたし達だって得意ってわけじゃ……」
「うん、知ってるよ。だからまだ基礎をやってる。皆おろそかにしがちだからな」
「先生……」
「だから、石田だけが特別じゃない。まぁ、たまに進度が遅くなったりするけどそれも許してやってくれないか」
はなをひいきしている。
けれど、それはあくまで生徒としてだ。
英語の苦手な一生徒として彼女の進度に合わせているだけ。
俺は講師として全員がちゃんと志望校に合格できるよう指導しているだけだった。

「分かったよ……」
「先生にそこまで言われちゃったら、許すしかないじゃん」
「うん、ごめんなー」
多少機嫌が直ったのか、俺の言葉に生徒たちが苦笑する。
それにホッとして、俺は生徒の肩にポンと手を置いた。
「大丈夫だ。遅れた分は冬期講習でみっちり叩き込んでやるからな」
「先生、やっぱろくな大人じゃなーい！」
「ほら、話してる暇あったらさっさと帰る」
「はぁーい。先生、さよならー」
元気よく手を振ってパタパタと去っていく生徒の背中を見送る。
今度こそ終わったと思って、ロッカーへ向かう。
慣れないことをしたせいの疲労感。
酒か煙草が欲しいと思った。
「おい」
「……ん？」
階段を上りながら今日の晩飯のメニューを考えていると、どこかから声がする。
こんな時間にまだ生徒が残っているはずもない。
気のせいかと思って、またロッカーを目指す。
「おい、先生！」
「あ……澤田か。どうした？　何か相談か？」
背後から聞こえた大声に驚いて振り返ると、見下ろす先には俺の受

け持った授業の生徒がいた。
名前は澤田祥希。はなと中学が同じで同学年。
成績は中の上。前回の模試では上から数えたほうが早かった。
俺と彼には講師と生徒という以外、何の接点もないはずなのにどうかしたのだろうか。

「何が塾生に手は出さないよ、だ……。お前、立派に手ぇ出してんじゃねえか！」
「澤田……？」
「はなだって塾生だってこと忘れてんじゃねえだろうな？」

話題に突然はなが出てきたことに目を見開く。
手を出すとか出さないとか、今日はどうしてこの手の話題ばかりなのか。
何かに呪われているとしか思えない。
澤田が何を勘違いしているのか知らないが、とりえあず俺は弁解にまわる。

「何言ってるんだ、澤田？　俺と石田は何でもないぞ？」
「嘘つき野郎。お前ら、幼馴染なんだろ？」
「あ……そうか。君ははなの……」

そういえば、中学に入って仲のいい男子が出来た話をまなさん経由で聞いたことがある。
今の今まですっかり忘れていたが、彼がそうなのだろう。
俺たちが幼馴染だと知っているのだから、これ以上教師然とする必要はない。

俺が肩の力を抜くと同時に、澤田が階段を上る。
踊り場に立つ俺と同じところまで上ってきても、身長は俺の方が上だった。
それに気づいたのか舌打ちをする澤田に、俺は苦笑しながら言った。

「それにしたって、俺たちに幼馴染以上の関係はないぞ？」
「……それなら、誰がはなの彼氏になっても、お前には関係ないよな」
「は……？」

予想していなかったその言葉に、俺は固まる。
意図が分からなかったことが伝わったのだろう、澤田が苛立った様子で続ける。

「俺がはなの彼氏になっても、邪魔すんなつってんだよ」
「……はなのことが好きなのか？」
「あぁ、好きだ。彼女にしたいと思ってる」

その言葉は、少しだけ衝撃的だった。
俺が中学生だった頃は、恋なんてものに現を抜かすことなく受験勉強にまっしぐらだった。
彼女を作るなんて夢のまた夢で、彼女のいる先輩たちを見てはうらやましく思ったものだ。

それに、はなを好きという男が現れるなんて思っても見なかった。
なんたって俺は、はなが生まれた当初から知っているのだ。
乳離れもハイハイしてたころも七五三だって知っている。

まだ子供だと思っていたのだ。

まだ恋も知らない子供だと思い込んでいたのだ。

もしかしたら。もしかしたら、はなも誰か好きな男がいるんじゃないか。

今、やっと思い至る。

「だから、手出すなよ。あいつは俺んだからな」

「……」

言い捨てられたそれに、俺は返す言葉を持たない。

今は何も考えたくなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6912z/

アネラ

2011年12月23日03時45分発行